

ベアトゥスの黙示録註解書写本について

中世初期のイベリア半島北部アストゥリアス地方のリエバナにある修道院の修道士、ベアトゥス(ベアトBeato ? -798)が776年に「ヨハネの黙示録註解書」を編纂しました。原本は既に存在していませんが、非常に人気を博し、10世紀から12世紀にかけて多くの写本がイベリア半島はもとよりフランスやイタリアなどで制作されました。ほとんどの写本には、彩色された挿絵が多数描かれており、その鮮やかな色使いと想像力豊かなインパクトの強い挿絵が後世にながく影響を与えてきました。

これまでに発見されたベアトゥス写本のうち、挿絵入りのものは29 写本あり、そのうち完本の写本は22写本、断簡の写本が7写本あります。

本ライブラリーには完本22写本のうち20写本のファクシミリ版があります。ファクシミリ版の中には羊皮紙の厚みやシワ・汚れ・破れ・落書きなどをそのまま再現した精巧なものもあります。

今月の展示写本

- (1) ベアトゥス黙示録写本 (①②③④⑤)
- (2) その他写本(⑥⑦)

①【ベアトゥス黙示録註解書：マドリッド写本】

10世紀前半に制作された最初期のベアトゥス写本。挿絵が切り取られている箇所が多く、当初60点以上あったと考えられる挿絵が29点の絵図しか残っていない。

②【ベアトゥス黙示録註解書：モーガン写本】

もともとは1冊であったが、1990年から1992年にかけてモーガン図書館が修理して2分冊とした。当初からの落丁はおそらく30葉程度と考えられる。そのうち挿絵は11葉と推測。

奥付けに写字・挿画をMAIUS(マイウス)が行ったと記載している。当時の写本では写字生などの名前などは記載されないのが普通であったが、ベアトゥスの写本には記載されているものが多い。

マドリッド写本は枠取りのない挿絵が主であったが、モーガン写本では挿絵に枠取りをして、画面の地を幾つかの帯状色面で抽象的に処理する手法は、以降の写本の手本になったといえる写本。

③【ベアトゥス黙示録註解書：シロス写本】

サントドミンゴ デシロス修道院で制作された本写本は、修道士ムーニョとドミニコが写字を、ペトロスが挿画を行ったことが書かれています。挿絵をすべて書き終えたのは、写字が終わってから18年後の1109年でした。

写本はほとんど完全な状態にあることから、あまり使用されていなかったと考えられます。

④【ベアトゥス黙示録註解書：ジローナ写本】

写本の最後の署名から、976年7月6日におそらくタバラの修道院で完成しました。挿画はエメテリウス(タバラ写本も制作)とエンが行いました。エンは女性名で修道女と考えられます。このことから女性も写本の制作に参加していたことがわかります。(当時の修道院は男女が厳密に分けられていなかった)

挿絵は、イスラムの影響を受けたモサラベ風の建築物や服装などが多くみられる。幾何学的な形状、豊かな色、装飾された敷地、様式化された人物といった形に、イスラム美術と装飾的伝統が混ざって表現されている。

⑤【ベアトゥス黙示録註解書：トリノ写本】

975年に製作されたベアトゥス写本ジローナ本を、12世紀のカタルーニャで写したものとみられる。ただし挿絵は12世紀風にアレンジされている。

⑥【新約聖書写本 Bat. Lat. 29】

13世紀前半に南イタリアでヴェネツィアの貴族ゾルツイ家のために製作されたと推測。縦20cm 横15cmの小型の写本。

172葉に118点の挿絵が描かれています。挿絵は4福音書と使徒行伝・黙示録に描かれ、黙示録の挿絵が26点と一番多く描かれています。

⑦【道徳聖書】

教訓聖書とも呼ばれます。

1220年代のパリで作られたものの一つで、現存する唯一のフランス語写本(他はラテン語)。

道徳的な教育のために造られた絵本のようなもので、もっとも有名な挿絵は一番最初に描かれている神の絵で、カオスから円形の宇宙を設計するためにコンパスを使用している創造主神の絵です。